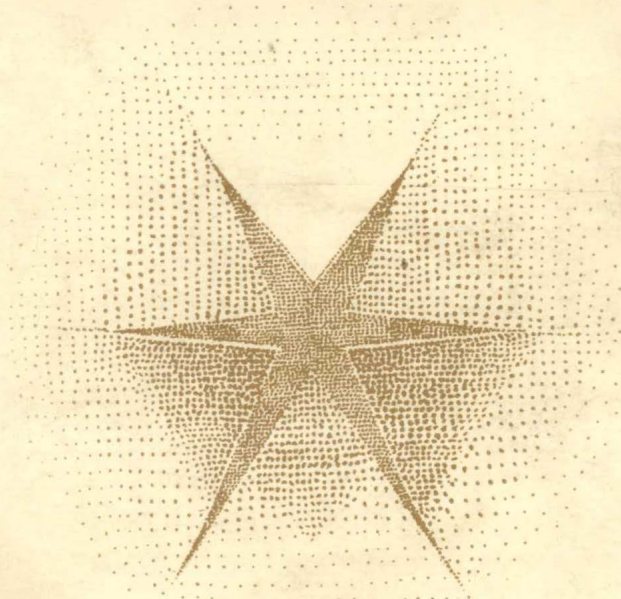


現代の哲学

中村行秀編著



青木教養選書

現代の哲学

中村行秀編著



青木教養選書

執筆者紹介

むら やま のり あき
村山紀昭

1943年生まれ
勤務先 北海道教育大学札幌分校

いし い のぶ お
石井伸男

1942年生まれ
勤務先 東京都立大学人文学部

なか むら ゆき ひで
中村行秀

1937年生まれ
勤務先 千葉短期大学

よし だ ち あき
吉田千秋

1943年生まれ
勤務先 岐阜大学工業短期大学部

よし だ まさ とし
吉田傑俊

1940年生まれ
勤務先 鹿児島大学教育学部

現代の哲学

1979年4月20日第1版第1刷印刷
1979年5月1日第1版第1刷発行

¥1300.

著 者 中村行秀 ほか
発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 8-36582番
電話・東京 (292) 0481 (代表)
郵便番号 101

(分)3010(製)1380(出)0015

柳沢印刷・高地製本

© Yukihide Nakamura, 1979

はしがき

私たち五人の筆者が『現代の哲学』という書名をえらんだ本書は、現代哲学の諸潮流の解説を目的とするものではない。本書の内容は、むしろ、唯物論の立場からする哲学概論である。

にもかかわらず、『現代の哲学』と題したのは、本書を書くにあたっての筆者たちに共通する立場と目的を書名にあらわしたいと考えたからである。

筆者たちは、現代に生きる生活者としての人間にとって切実な問題は、哲学にとってもまた切実な問題でなければならぬと考えている。いま、私たちの前には、ロッキード、ダグラス、グラマン社と日本の政・財界をめぐる一連の航空機疑獄事件、元号法制化・有事立法などの軍国主義復活の企て、頻発する凶悪犯罪と子どもたちの非行・自殺など、政治・経済・教育・文化のあらゆる面にわたる危機的状況が進行している。哲学が、こうした「現代」に無力であっていいわけがない。

たしかに、哲学は、自然・人間・社会のあり方を原理的に究明する学であつたし、今後ともそうであろう。しかし、そのことは、哲学が抽象的な原理にとどまっていってよいということを意味するのではない。哲学は、生活のなかからうまれて、生活をぎりひらいていくような原理に、つまり「思想」にならなければならないのである。

私たちは、本書を構成する五つのテーマを、こうした観点から設定した。

第一篇 人間論（村山紀昭）は、人間性そのものが崩壊の危機に直面している現状から筆をおこし、「人間とはなにか」という古くてしかも新しい問いに答えようとする。プラグマティズム、実存主義、現代社会学が主張する現代の代表的人間観の諸タイプを紹介したのち、それらとの対比でマルクス主義の人間把握の基礎を、自然存在・意識的存在・社会的存在の三つの視点から説き、最後にその展開として、「人間性」の問題にふれている。

第二篇 社会論（石井伸男）は、一見「時代閉塞」ともみえる現代社会に焦点をあてて、そのとらえ方を論じている。大衆社会論、産業社会論、管理社会論というアメリカ社会学系統の諸理論を批判的に検討したのち、史的唯物論の立場から現代の資本主義の特質と問題点をどう把握するかをのべ、最後に、社会体制の選択、自由と民主主義、市民的自立と階級的連帯の三点にわたって、現代社会の展望をさぐるというものである。

第三篇 認識論（中村行秀）は、人間の意識と世界との全体的なかわりをあきらかにすることを認識論の現代的課題とする見地から、種々の観念論の立場にたつ認識のとらえ方を批判し、これとの対比で認識にかんする唯物論の立場、すなわち「反映論」の基礎をのべている。さらに、人びとの意識が認識・感情・意志の相互作用からなっている姿を、現代に生きる人びとの社会生活の現実のなかで豊かにとらえようと試みている。

第四篇 価値論（吉田千秋）は、これまで蓄積の少ない「価値」の問題に新しい接近をくだてたものである。「生きることの価値」自体が問われるような価値をめぐる現代の状況を検討したのちに、価値とはなにか、価値にはどのようなものがふくまれるか、を論じている。とくに人間らしい生き方をいとなむうえで、自然的価値・社会的価値・人間的価値の相互の関係と位置づけを解明しようと努力している。

第五篇 西洋思想と日本の哲学思想（吉田傑俊）は、現代に生きる日本人の思想形成にあたつて避けてとおることのできない西洋思想の主體的撰取の課題にとりくんだものである。ここでは、近代日本思想史から、中江兆民、和辻哲郎、戸坂潤の三人を典型としてとりあげて、かれらの思想形成を内在的に分析しつつ、外来思想が日本の土壌に定着する歩みを追跡し、現代のわれわれにのこされた課題をあきらかにしている。

以上のように、本書は五人の筆者の分担執筆というかたちをとつてはいるが、いわゆる「論文集」ではない。筆者たちは、企画の段階から仕上げていたるまで、内容にかんして相談を重ねた。相談は十分とはいえないまでも、その結果書きあらためた部分も少なくない。しかし、最終的には、文体、用語などにかんする必要最少限の統一にとどめて、筆者それぞれの個性を生かすことにした。

また、本書は、現代日本の国民的教養として広く読まれることを願つて執筆されたが、同時に、大学の一般教養のテキストとしても使われるよう工夫し、配慮してある。多くの方々に迎えられ、ご批判をいただくことを願ひしたい。

一九七九年 春

執筆者一同

目次

はしがき	iii
哲学の課題——序にかえて	3
第一篇 人間論	
第一章 人間論の課題	10
第一節 現代における人間の問題	10
第二節 人間の哲学的探求と人間諸科学	13
第三節 人間の本質と現存	17
第二章 現代人間観の諸タイプ	21
第一節 生物学的人間観——プラグマティズム	22
第二節 実存的人間観——実存主義	28
第三節 「社会的」人間観——現代社会学	34
第三章 人間と人間性の価値	39

第一節	自然と人間との統一	41
第二節	労働と人間	46
第三節	人間と人間との共同	52
第四節	人間性の価値	59
第二篇 社会論		
第一章	現代社会論の諸様相	64
第一節	問題の設定	64
第二節	大衆社会論	68
第三節	産業社会論	71
第四節	管理社会論	75
第二章	資本主義社会とはなにか	82
第一節	社会思想史的接近	82
第二節	史的唯物論の見地	86
第三節	資本主義の特質と矛盾	91
第三章	現代社会の展望	97
第一節	資本主義と社会主義	97
第二節	自由と民主主義	102

第三節 市民的自立と階級的連帯	106
-----------------	-----

第三篇 認識論

第一章 認識論とはなにか	114
--------------	-----

第一節 認識論の課題	114
------------	-----

第二節 認識論をめぐる対立	116
---------------	-----

第三節 客観的觀念論	119
------------	-----

第四節 主観的觀念論	122
------------	-----

第五節 認識と実践	126
-----------	-----

第二章 反映論	129
---------	-----

第一節 反映過程	129
----------	-----

第二節 能動的反映	133
-----------	-----

第三節 真理	140
--------	-----

第三章 認識・感情・意志	145
--------------	-----

第一節 認識・感情・意志のつながり	145
-------------------	-----

第二節 感情と意志	149
-----------	-----

第三節 非合理主義の克服	154
--------------	-----

第四篇 価値論

第一章	現代と価値問題	162
第二章	価値とはなにか	169
第一節	事実認識と価値評価	169
第二節	事実と価値の分離論	172
第三節	価値の客観的契機と主観的契機	176
第三章	欲望の発展と価値の展開	180
第一節	人間生活の固有性と価値体系	180
第二節	生産活動と物質的価値の形成	183
第三節	精神的諸価値の位置	187
第四章	社会的価値と価値観の対立	192
第一節	社会的価値の形成	192
第二節	社会的規制原理と法的・政治的価値	194
第三節	価値観の対立と善悪の探究	197
第五章	人間の価値と尊厳	202
第一節	「ひと」の価値の自明性	202
第二節	「いのち」の価値と尊厳	206

第三節	個性的な生き方の尊重	210
第五篇	西洋思想と日本の哲学思想	
第一章	西洋思想と日本の哲学思想の問題	216
第一節	日本の哲学思想の問題性	216
第二節	西洋思想受容の日本的形態	218
第二章	自由民権の思想家——中江兆民	222
第一節	兆民の哲学観とその方法	222
第二節	哲学の実践	224
第三節	哲学への確信と期待	231
第三章	アカデミーの哲学者——和辻哲郎	234
第一節	和辻と日本のアカデミー哲学	234
第二節	『風土』と日本人論	236
第三節	日本的倫理学の形成	239
第四節	「国民道徳論」の展開	244
第四章	反ファシズムの唯物論者——戸坂潤	247
第一節	唯物論への道	247

第二節 戦前ファシズムと唯物論研究会	252
第三節 ファシズムとの闘争	255
第五章 むすびにかえて	258
あとがき	263
人名索引	巻末

現代の哲学

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

哲学の課題——序にかえて

「理学」「希哲学」などの変遷をへて、「哲学」という訳語で定着した西洋のことば（英 *philosophy*）の語源が、ギリシア語の「愛知」を意味する「フィロソフィア」（*philosophia*）であることはよく知られている。しかし、わが国における西洋哲学の導入のしかたの偏向的な傾向も手伝って、フィロソフィア＝愛知における「知」が、もっぱら、実生活ときりはなされた「知のための知」と解されたために、古代ギリシアにおける「フィロソフィア」なることばが、理論的かつ実践的な知の探究を意味していたことは、それほど知られていないと思われる。

わが国におけるギリシア哲学の研究に一時期指導的な役割をはたされた出隆氏は、論文「フィロソフィアの由来と古代における『哲学』の概念」で、つぎのような指摘をしている。

『フィロソフィア』というの、ソクラテスの死後すなわち前第四世紀のプラトン、およびその後のギリシアおよびローマの思想家たちのあいだでは、だいたいにおいて、自然界および人間社会の一切を全般的に見わたしてその真理真相をその根本原理から理解し認識しようとする或る理論的な研究であり、かつまた人間やその社会を正しく生かし善くあらせる道を見いだしてそこに自他を導こうとする倫理的・宗教的ないし政治的な実践の心術であったと言えよう」。

このように、「フィロソフィア」ということばが、古代において、自然と人間社会にたいする理論的か

つ実践的なとりくみという意味をもっていたということは、当時あるいは以後において、このことばがつねにこれら両義をあわせもっていたということを意味するわけではない。むしろ、哲学史をつうじてみられるのは、理論的と実践的という両側面の分離・分裂であり、あとでふれるようにこの側面を統一したところにマルクスの功績があるのだが、同時に、哲学上のすぐれた遺産をのこした哲学者たちのすべてが、これら両側面の結合を志向していたことも見すごされてはならない事実である。かれらにとって哲学の課題は、かれらの生活の現実のなかからその時代の焦点的な問題を掘りおこし、それを根本原理から追求することだったからである。

たとえば、プラトンがえがくソクラテスは、アテナイ人の現実の批判者以外のなにものでもなかったし、近代哲学の父といわれるデカルト、イギリス経験哲学の開拓者であったベーコン、ホッブズ、ロック、あるいは、フランスのドルバック、エルヴェシユス、ディドロなどの唯物論者たち、また、カントからヘーゲルにいたるドイツ観念論者たちの哲学のいずれもが、それぞれの時代の現実がつきつける問題とのとりくみの結晶なのである。

哲学と時代とのこうした関係を、ヘーゲルはつぎのように表現している。

「存在するところのものを概念において把握するのが、哲学の課題である。というのは、存在するところのものは理性だからである。個人にかんしていえば、だれでももともとその時代の息子であるが、哲学もまた、その時代を思想のうちにとらえたものである。なんらかの哲学がその現在の世界を越え出るのだと思うのは、ある個人がその時代を跳び越し、ロドス島を跳び越えて外へ出るのだと妄想するのとまったく同様におろかである。その個人の理論が実際にその時代を越え出るとすれば、そして彼が一つのあるべき世界をしつらえるとすれば、このあるべき世界はなるほど存在してはいるけれども、たんな

に彼が思うことのなかでしかない。つまりそれは、どんな好き勝手なことでも想像できる柔軟で軟弱な境域のうちにしか存在していない」(『法哲学要綱』)。

ここでヘーゲルは、二つのことをのべている。一つは、哲学は「時代を思想のうちにとらえたもの」だとのべて、哲学とその時代の現実とのかわりを強調したことである。これは、かれのするどい歴史感覚の表明として評価されねばならない。けれども、ここには、それとならんで、哲学の課題は「あるべき世界をしつらえる」ことではなくて、「存在するところのものを概念において把握する」ことだとして、哲学と現実との和解を説く保守主義の立場が表明されているのを見のがすことはできない。ヘーゲルにとって哲学は、現実が成熟をとげるなかではじめて、その追認としてしか現われることができない世界自身の自己解釈にすぎないものである。哲学にたいするかれのこうした諦念は、「ミネルバのふくろうは、たそがれがやってくるとはじめて飛びはじめ」という有名な句に表現されている。

ここにみえるヘーゲルの哲学観には、哲学史のうえに足跡をのこしたすぐれた哲学者たちの傑出した点とともに、かれらがもっていた限界が凝縮されているといえるだろう。かれらが傑出していた点は、かれらの哲学が、先行哲学者の見解の研究・解説のようなものではなくて、かれらにとつての現代の問題の原理的な追求であつたことである。かれらのなかには、時代の問題の探究にとどまらずに、時代の批判へと歩をすすめた者も少なくなかつた。けれども、そうした批判でさえ、概念的な批判、「精神的批判」(マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』)の領域にとどまって、時代の「実践的転覆」(前掲書)を課題とする批判にまでいたることはできなかった。これがかれらの哲学の限界だったといえるだろう。

哲学のこの限界を突破したことに、マルクスの歴史的功績がある。かれにおいてはじめて、「批判的革命的」という真の批判の精神が哲学に結実するのである。ヘーゲル哲学の観念論的な影響を脱しきれな